正反対無限回帰ボク達ぐるぐる？

九九人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
正反対無限回帰ボク達ぐるぐる？

【Ｎコード】
Ｎ４７５２Ｚ

【作者名】
九九人

【あらすじ】
ＳＮＳサイトの自殺志願コミュニティで知り合ったコーキとハルシオンは共依存的関係を続けながら日々自閉し、自殺するまでの時間を先延ばしにしながら過ごす。しかし、ハルシオンは突然コーキの前から姿を消してしまう。悲しみに暮れるコーキの前に突然亡霊になったハルシオンが現れて――。
倫理観から百八十度背を向けて全力疾走したようなお話

おーぷにんぐ

ハルシオンさんは、僕が部屋の奥からもはや骨董に近いテレビゲーム機を取り出すのを、不思議そうに見ていました。ハルシオンさんはそのゲーム機がなんなのか分からないらしく、「それはなあに？」と訊いてきました。

「ゲームです。家庭用ゲーム機。だいぶ古い型ですけどね。マリオとかって聞いた事ありません？　あれとか、他にも色々なカセットで遊べるんですよ」

僕がそう言うと、ハルシオンさんは「あ、それ知ってる」とはしゃぎはじめました。

「ぴょーんて跳ねるお髭の生えた子供でしょ！　インターネットで見た事ある！　へえー、じゃあ、それってファミコンってやつなんだ」

マリオに対する認識が少し違うような気がしましたが、だいたい合っていたので頷きました。

「なんでそんな物出してたの？」

「僕とお話しだけしているのは退屈だと思って。これで遊びませんか？」

ゲーム機を好奇の目で見ていたハルシオンさんは、大きく二回頷きました。絹のように柔らかそうなハルシオンさんの黒髪が、さらさらと肩のあたりで跳ねます。

「別にコーキくんとお喋りするのに飽きたわけでも退屈なわけでもないのよ。コーキくん、喋るの上手いし。けど、コーキくんとするゲームはもっと楽しいかなって」

お世辞だろうと、そう言われて悪い気になる男子はいません。ただでさえ人と会話するのが苦手な僕なのでなおさらです。舞い上がりそうになる気持ちをはしっと押さえ、それでも照れを隠しきれない表情を背に隠してゲームのセッティングをします。おそらく僕の照れはハルシオンさんには伝わっていているけれど、ハルシオンさんは無用な追求などせずに僕の作業が終わるのを待ってくれていました。まるでサンタクロースからのプレゼントを待つ子供のようです。

部屋のテレビは最新の薄型液晶で、そんなテレビとボロボロのテレビゲームがコードで繋がった姿は少し滑稽でした。とても僕より年上には見えません。セッティングが終わった事をハルシオンさんに伝え、ゲームを起動させます。

「ハルシオンさん、やり方分かります？」
「分かんない。ゲーム機なんて触った事ないから」

そう言いながらハルシオンさんは、まるで獣の頭を撫でるような慎重さでコントローラーに触れました。そのたどたどしい手つきに、僕は思わずにたにたと笑ってしまいます。

「もしかしてハルシオンさん、ゲーム機が襲ってくるんじゃないか、なんて思ったりしています？」
「そんな事ないわよ。いくら私だってそんなに世間知らずじゃない」
ハルシオンさんは口を尖らせ怒りました。「……でも、強く握ったりしたら壊れてしまわないかしら」
僕は頬が引き攣りそうなほどに大笑いをしてしまいました。
「大丈夫ですよハルシオンさん。ハルシオンさんくらいの握力じゃあ、みかんの皮だって剥けませんよ」
「失礼ね、みかんの皮くらい剥けるわよ」

ハルシオンさんは頬を膨らまして自らの不満の気持ちを僕に伝えます。しかし実際、みかんの皮は冗談にしてもハルシオンさんの腕は植物の茎みたいに細く、自分の鞄以上に重たい物など持った事がないに違いありませんでした。それこそ僕がハルシオンさんの腕を強く握りしめればばきばきと折れてしまうでしょう。

「貸してください」

実演のため、まず僕がゲームを操作する事にしました。ステージを選んで、スタート。画面の左端から右端へとマリオを走らせます。

「わー、こんななんだ！」

ハルシオンさんはさっきの不機嫌が嘘のように目を輝かせ、僕の操作を見ています。その視線がとても面白かったので、僕は調子にのって何もない場所でぴょんぴょんとマリオをジャンプさせます。ハルシオンさんはその度にきゃーきゃーと歓声を上げました。マリオは次々と敵を倒したり、時には躱したりしながら、ついにゴールに辿りつきます。宿敵クッパを倒し、姫様を救出。ハルシオンさんは万雷の拍手で僕とマリオの勇姿を称えました。

「だいたいこんな感じです。はい、どうぞ」

僕はコントローラーを渡し、どのボタンを押せばマリオがどう動くのかを懇切丁寧に教えます。けれど、人生初めてのゲームですのでハルシオンさんはとても下手でした。ハルシオンさんの操るマリオは風車に突撃するドンキホーテのように無謀な攻撃を繰り返しては敵にやられ、時にはパラシュート無しでスカイダイビングをする自殺者ばりに自ら穴へと落ちていきました。

それでも、ハルシオンさんはゲームを楽しんでいるようでした。敵に倒されたり穴へ落ちたりする度ハルシオンさんは大きく悲鳴を上げ、次は負けないと闘志を燃やしながらまたスタート地点からや

り直すのでした。

「ハルシオンさん、楽しいですか？」

僕がそう訊くと、ハルシオンさんはゲーム画面を見据えたまま大きく頷きました。

「楽しい。すごく楽しい。人生で一番楽しいかも」

「僕と出会った事が一番じゃないんですね」

「それは二番目。コーキくんとゲームをやっている今が一番楽しいの」

僕は条件反射のようにハルシオンさんを後ろから抱きしめました。ハルシオンさんの髪の匂いが鼻孔の奥を擽ります。どうして女性の匂いというのはいつの時代も男心を捕えて離さないのでしょう。前に回している僕の腕を、ハルシオンさんがぎゅっと握ります。ハルシオンさんの指先はソフトクリームを直に触れたような冷たさで、背中がゾクゾクとしました。当然ゲームはほったらかしです。テレビ画面の中では、指揮官を失ったマリオがステージの中央で、寂しそうにぽつんと立っていました。敵も現れていないので制限時間だけが刻々とマリオの命を狭めていきます。まるでハルシオンさんに出会う前の僕のようです。

制限時間が零になり、ゲームオーバーになっても僕とハルシオンさんはそのままの姿勢でした。冷たかったハルシオンさんの身体が僕の体温と混ざって、どんどんと熱くなっていきます。部屋は静かで、ゲームのＢＧＭと二人分の吐息の音しかありませんでした。触れ合っている僕らには、互いの心臓の音まではっきりと聴こえます。二人の心音が時には同時に、時には半拍ずれてどくどくとビートを刻みます。僕とハルシオンさんの心臓がセッションをしているようでもありました。

僕は、ハルシオンさんの髪の匂いがさっきと違う事に気付きました。それは発情した女の匂いでした。ハルシオンさんがもぞもぞと動いてこちらへ振り返ろうとしたので、僕は腕を離します。正面から合わせたハルシオンさんの目は熱っぽく、魅惑的でした。僕の視線は彼女の目から、唇へと動きます。厚ぼったく、ほんのりと塗ったルージュが色っぽいです。その唇が、動きました。「コーキくんって可愛いよね。女の子みたい。私なんかよりずっと可愛い」

ふふ、と笑いながらハルシオンさんは顔を寄せ、僕の耳を甘噛みしました。耳の奥へとぬめった舌が侵入してきて、思わずびくりと身体を震わせてしまいます。

「ねえ」

ハルシオンさんが吐息のように耳元で囁いてきました。僕にとってハルシオンさんの声は麻薬みたいなものです。その声を聴くと僕はいつも頭がぼうっとして馬鹿になってしまいます。ハルシオンさんの声は僕をバッドトリップさせようと、新たな言葉を紡ぎだします。

「私を殺して」

僕の両手がゆっくりとハルシオンさんの首にかかります。ハルシオンさんは僕を受け入れるよう両手を広げ、仰向けに倒れました。僕が彼女に馬乗りになっている状態です。

恥ずかしながら、僕は興奮しておりました。畳の上にハルシオンさんの長い黒髪が散らばり、扇状に広がっています。ハルシオンさんの身体には力が入っておらず、僕に全てを委ねている状態です。彼女を上から見下ろしていると、抑えても抑えても僕の内側から『彼女を征服したのだ』という喜びと、『もっともっと彼女を独占し

たい』という支配欲求がふつふつと湧き出て、僕の脳内を湯気でむちゃくちゃにしてしまいます。

僕の両手はいまだに彼女の首にかかっておりました。この手に力を込めたら、ハルシオンさんはどういう反応をするのだろう――苦しむ顔をするのか、それとも、人生を全うした者にしか味わえない愉悦の表情をするのだろうか。それを考えるだけで、僕の下半身には血が滾ってしまいます。

彼女は僕の衝動を全て理解している、というような慈母の目で僕を見上げました。

そう云って僕の脳を直に揺さぶります。もう耐えられませんでした。

僕の手は徐々に力が入っていき、細っこいハルシオンさんの首の気管を圧迫していきます。ハルシオンさんの身体は本人の意思とは無関係に生を求め、呼吸をしようと口を開いて空気を取り込もうとします。口をぱくぱくさせている様子が金魚みたいに滑稽なので、僕は体重をかけ、潰すように首を絞めました。僕の手の中で、ハルシオンさんのカルシウム不足な骨が軋みを上げているのが分かります。

ぼきり、と音がしました。

しかしそれは彼女の声によるバッドトリップが聴かせた幻聴でした。僕はハルシオンさんを押し倒してはいましたが、首を絞めてなんていないのでした。ハルシオンさんの首に手をかけたままで放心していたようでした。

「どうしたの、殺してくれないの？」

ハルシオンさんが、期待に満ちた目で僕を見ます。僕は首から手を離して、すぐに眩暈のようなものに襲われてハルシオンさんに重なるように倒れました。

「大丈夫、コーキくん？　調子悪い？」

「大丈夫ですよ。ハルシオンさん」僕はそのように虚勢を張りましたが、ばればれだと気付いたので甘えてみる事にしました。「やっぱ、もうすこしこのままでいいですか？」

「えー重い」

ハルシオンさんはそう口を尖らせながら、非力な彼女が出せる力をめいっぱい使って僕を抱きしめました。それだけの事なのに、僕は安心して眠くなってしまいます。僕は彼女の長い髪に顔を埋めました。

「ハルシオンさんの髪、いい匂いがする」

ハルシオンさんの髪を指にかけ、くるくるとしたり、さらさらと撫でたりして感触を楽しみます。

「コーキくんって髪、好きだよねー」

ハルシオンさんは呆れながらも、僕の行為を止めたりはしませんでした。

「死ぬのはまた別の日にしましょう。今日は、ずっとこのままでいたいです」

「いいよ、いつでも」

僕たちはキスをしました。

おーぷにんぐ（後書き）

二十代過ぎた今でも自分はマリオで遊んだ事ないです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4752z/

正反対無限回帰ボク達ぐるぐる？

2011年12月16日00時47分発行